

バッハ:カンタータBWV4の歌詞についての一考察 (1)

このカンタータの原曲は11世紀頃のグレゴリオ聖歌「過越しの生贄を讃美せよ(Victimae paschal laudes)」の旋律にマルティン・ルターが1524年自作の7節の歌詞をはめ込んだコラールであり、全節とも最後はハレルヤで終わっているのでもいかにも復活祭の礼拝で歌うのにふさわしいが、祝祭的色彩は少なく「復活祭を単なる祭りとしてではなく、原罪の深さ、贖い主への感謝、罰としての死から救いとしての死へと転換された死の概念、救い主の勝利といった受難の意義を再確認するため、厳格な詩と旋律で歌いあげたもの」(ウイキペディア)である。カンタータBWV4は冒頭のシンフォニア(序曲)を除いてこのコラール全7節を用いたコラール変奏曲であり、バッハの教会カンタータの中では最初期のもので、1707年(22歳)ミュールハウゼン(前回の演奏会のチラシ・プログラムの表紙を飾った教会があるところ)でのオルガニスト採用試験の応募作品と言われている。

さてこのカンタータの歌詞はルターの原曲をそのまま採用したもので上述のように神学的な意味が多く含まれており、一筋縄で理解できるものではない。特にシンフォニアに続く第2曲(第1節)の冒頭の歌詞 „Christ lag in Todes Banden” に対しては、「キリストは死の網目(あみめ)につながれたり(杉山好・磯山雅)」、「以下「キリストは」を省略)」、「死の網目うけて(加藤浩子)」、「死の網目について(川端純四郎)」、「死の枷(かせ)に横たわれり(秋元里与)」、「死の絆(きずな)につきたまえり(樋口隆一)」、「死の絆につかれた(金沢正剛)」、「死の虜(とりこ)となり給う(高橋昭)」、「死のとりことなれり(門倉一郎・吉井亜彦)」、「死に繋(つな)がれし(大村恵美子)」、「死の縄に縛(しば)られて(国井健宏)」など多数の訳詞がある。

ドイツ語の Band は一般に「紐、帯、ベルト、リボン、テープ」を意味する中性名詞であるが、古語や雅語として「枷、束縛」の意味があり、筆者の歌詞逐語訳の注釈でも示したように in Banden liegenという熟語(「縛(いまし)めを受けている・囚(とら)われている」の意味で歌詞中の lag は自動詞 liegen(横たわる)の過去形)がある。上述の訳詞はすべて「死」という抽象的な概念とこの古語の熟語の言い回しを結び付けたもので、筆者の試訳も「死の縛めにあった」とした。これに対し岩波新書に「J.S.バッハ」を書いている辻莊一は「死の網目」など抽象的なものではなく、具象的なものずばりの「屍布に包まれ横たわりたまえ」と訳すべきであると主張している(大村恵美子著「バッハの音楽的宇宙」丸善ライブラリー)。「十字架上で処刑されたイエスはユダヤ人の埋葬の習慣に従って香料を入れ亜麻布で巻かれて墓に納められた。ルターはこの光景をコラールの中に取り込み、きれいごとではなくより真実な出来事として訴えている。」というのである。この考えには一理あるが、屍を包む布はドイツ語では Grabtuch(直訳すれば「墓布」で一般的には「聖骸布」と呼ばれる)であり、Band を「屍布」と解するのはちょっと苦しいのではないだろうか。

次の歌詞 für unsre Sünd gegeben における gegeben の解釈も一考を要する。gegeben は geben(英語の give)の過去分詞で「与えられた」という意味から「私たちの罪の代償として(十字架につけるために祭司長などに)引き渡された」と訳す例が多い。しかしネット検索をしていたら、ルター聖書ではこの意味での「引き渡される」には überantwortet が使用されており、gegeben は新約聖書の

ガラテヤの信徒への手紙第1章第4節「キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださった(der sich selbst für unsre Sünden gegeben hat)」から取ったのではないかという解説記事(バッハクライス神戸のカントコ4)を見つけた。バッハはこの歌詞の箇所でも短調から長調またはホ長調へ転調しており、「死に引き渡された」というマイナスイメージではなく、「人間の罪のためにキリストが(私達に)与えられ、そのことによって生命がもたらされた(第4行の歌詞参照)」というプラスイメージで作曲したのではと述べている。これによれば贖罪としてのキリストの死(1-2行)と生命をもたらす復活(3-4行)の意義、ひいては歌詞全体の解釈が明確になり達見である。筆者の試訳ではこれを踏まえて「身を投げ出して」としたがどうであろうか。なお3行目の歌詞に出てくる wieder (again) は通常は「再び(once more)」を意味するが、キリストがまさか2度も復活するわけもなく、単に強調の意味で使用される副詞で筆者は「今や」としたが訳さなくても良いくらいで、「再び」とするのは誤訳に近い。次の Des 以下の4行の歌詞については構文上はともかく解釈上は特に問題ないであろう。

ルターのコラールは前述のように7節あるが、それらは生と死の格闘を描く第4節(第5曲)を中心にシンメトリーを形成しているという。今回は全曲演奏ではないので省略される独唱または二重唱の歌詞については解釈上難しいこともあってここでは触れないが、第5曲(第4節)の歌詞もなかなか変わっており、特に最後の2行は難解である。この歌詞に接してまず想起したのは15・16世紀のフランドル地方(現在のベルギー)の画家ヒエロニムス・ボッシュとピーテル・ブリューゲルの数々の奇怪な絵画である。下の絵はブリューゲルの「死の勝利」(1562年)で、骸骨姿の「死」が「生者」を容赦なくやっつけている様子が描かれているが、これをまさに逆転して「生の勝利」を謳ったのが第5曲の内容ではないだろうか。(続く)



【後記】 本年もどうぞよろしくお願いいたします。今回は急遽歌うことになったカンタータの歌詞の解説です。モテット2番と同様になかなか手応えのある作品ですが、歌詞の理解の一助になれば幸いです。(山田)